別添４

別紙３

厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）
「アジア太平洋地域における薬剤耐性病原体のアウトブレイク対応力強化に資する研究（25CA2034）」
代表研究報告書

研究代表者	山岸　拓也	国立感染症研究所　薬剤耐性研究センター
研究分担者	黒須　一見	国立感染症研究所　薬剤耐性研究センター
	中下　愛実	国立感染症研究所　応用疫学研究センター
研究協力者	澤　友歌	国立感染症研究所　応用疫学研究センター
	大野　智裕	国立感染症研究所　応用疫学研究センター

研究要旨

世界的な公衆衛生上の大きな課題である薬剤耐性（AMR）は、集団発生への早期対応が公衆衛生や医療における課題である。本研究では国内外の薬剤耐性菌による集団発生対策に関しアジア太平洋地域で共通するAMR事例対応に関する課題の検討を行った。

2026年2月にWPROとWHOラオス人民民主共和国事務所がラオス人民民主共和国で実施した研修を支援した。研修に先立ち前年にアウトブレイクを経験した病院の視察を実施し、現地の病院の様子を把握した。研修では、7の中核病院（30名）を対象とし、ESBL産生肺炎桿菌を題材としたシナリオに基づくグループワークを実施した。記述疫学に関する技術支援、ならびに日本におけるアウトブレイク対応経験の共有を通じて研修を支援し、医療機関間の活発な議論と参加者間の認識共有を促進した。その結果、各医療機関はAMR対策の現状を把握し、今後のAMR対策のアクションポイントを整理し、実施可能な対策とその期日を設定することができた。本研修支援は、各医療機関がAMR対策マニュアルを更新するための手助けになるとともに、我々が本邦以外でのAMR対応の準備状況を把握する機会となった。

この活動はWPROと連携し、アジア太平洋地域のAMRアウトブレイク対策の更なる改善に貢献したと考えられた。

Ａ．研究目的

様々な微生物の薬剤耐性（AMR）は、今なお世界的な公衆衛生上の大きな課題である。国内で様々な薬剤耐性菌が監視されているが、その集団発生をいち早く捉えて対応していく事は依然として医療現場や公衆衛生における課題である。本研究では国内外の薬剤耐性菌による集団発生対策に関し、WHO西太平洋地域事務局（WPRO）とWHOラオス人民民主共和国事務所がラオス人民民主共和国保健省とともに実施した医療施設AMRアウトブレイク対応力強化指導者研修に参加し、途上国における対応力強化の課題を検討した。

医療機関におけるAMRアウトブレイクの対応は各国で課題となっており、WPROは、同事務局が作成した薬剤耐性菌アウトブレイク対応ガイダンスを元に、各国での対応力強化を進めている[1)]。その活動の一環として、ラオス人民民主共和国でワークショップを実施した。当該ワークショップでは、①院内AMRアウトブレイク調査・対応について、公衆衛生緊急事態管理（Public health emergency management；PHEM）を組み込んだ体制の確立を推進し、リスクと重症度に応じた多部門・多機関の連携強化を促進。②全国的なAMRアウトブレイク調査・対応能力を強化するため、病院の最前線で働く人、FETP修了生、The National Center for Laboratory and Epidemiology（NCLE）担当者を対象に指導者研修（ToT）を実施。③WPROのアウトブレイク調査・対応ガイドラインを活用し、国内のAMRアウトブレイク調査・対応マニュアルの更新のための推奨事項とロードマップを提供。④ステークホルダーと専門家の双方的な議論を通じ、状況に応じた具体的な提案を提示して、国の抗菌薬ガイドライン（成人と小児）の改訂を支援。の４点を目的とした。

併せて、当該ワークショップへの参加を通して、我々がラオス人民民主共和国における薬剤耐性菌による集団発生対応（実地疫学調査含む）の状況を把握することも目的とした。

Ｂ．研究方法

2026年2月11-13日の3日間、WPROの主催で、WHOラオス人民民主共和国事務所がワークショップを実施した。対象は、7の中核病院から多職種の30名。WHO西太平洋地域事務局が作成したシナリオをベースとしたグループワークが実施され、我々は、記述疫学に関する技術的な支援を行い（図1A）、本邦でのアウトブレイク対応の経験に基づいて助言するなど、WPRO担当者とともにワークショップを支援した。

Ｃ．研究結果

ワークショップに先立ち、前年にアウトブレイクを経験した参加病院（Mother and Child hospital）を視察し、実施された感染対策について意見交換を行った（図1B）。

ワークショップには30名の参加者が参集した。参加者は病院ごとに多職種でグループワークを実施して活発な議論がなされ、病院間での意見交換も盛んに行われた。WHOのアウトブレイク調査・対応ガイドラインについてはよく理解され

た。

シナリオのテーマは同国で検出されることが多い、ESBL産生肺炎桿菌とした。しかしながら、実際にAMR感染症の対応を行っている病院は偏りがあり、AMR対応が重要である認識はあるものの、馴染みがない参加者も多く見受けられた。また、参加病院の中には、培養検査が実施できない、IPCのシステムがない病院も多く、院内の耐性菌分離状況が把握されていない状況であった。各医療機関は、ワークショップの前半を通じて自身の病院でのAMR対策の現状を把握し、後半でAMR対策のアクションポイントを整理し、今後実施可能な対策とその期日を設定することができた。

D. 考察

参加者は積極的にワークショップに取り組んでいた。系統的なアウトブレイク対応の知識を持ち合わせていない参加者同士が共通認識を持つためにグループワークが有用だった。また、多くの病院では、AMR対策のシステムが整っていなかった。グループワークを通じて各病院で今後実施する取り組みへの議論が深まった。

しかしながら、同国には耐性菌の分離状況を把握するシステムがなく、AMR対応を行ううえでのベースラインが不明で、具体的な目標設定や、評価が難しい状況であった。このような状況では、各病院からのEBSが重要であった。同国保健省も今回のワークショップを通じて状況を理解し、今後の対策につなげていくものと思われた。ワークショップ参加を通し、我々が本邦以外での薬剤耐性菌集団発生対応の準備状況について情報収集を行う貴重な機会になった。

アジア太平洋のAMRアウトブレイク対策の改善に関しては、今後も、WHO西太平洋地域事務局と連携しつつ、AMRに関するアジア太平洋ワンヘルスイニシアチブ（Asia-Pacific One Health Initiative on AMR：ASPIRE）の理念に照らし合わせて効果が見込まれる活動を更に推進していく事が重要と考えられた。

参考文献

1）World Health Organization Regional Office for the Western Pacific (WPRO). Responding to outbreaks of antimicrobial-resistant pathogens in health-care facilities: guidance for the Western Pacific region. Manila: WPRO; 2022.

図1. ワークショップにおける支援の様子

A. 記述疫学に関する技術的支援



B. 病院視察

